

今求められる幼稚園像[†]

— 幼児期前期の発達と教育 —

伊東 明彦*・高柳 恭子**・岩渕千鶴子**・五十嵐市郎**

前原 由紀**・稲川 知美**・星野さやか**

宇都宮大学教育学部*

宇都宮大学教育学部附属幼稚園**

子どもの育ちは連続しており、幼稚園入学前の発達の特性や経験も含めて一人一人を理解し、発達をとらえていくことで幼稚園教育が充実し、やがて、小学校へのスムーズな接続や児童期以降の教育が充実していくことにつながっていくのである。また、3歳児以前の過ごし方が幼児期だけでなく思春期の問題も含めて今後の人間形成に大きな影響をあたえかねないことも危惧している。本研究では、保育園との連携を軸にしながら幼児期前期の発達と教育についてまとめ、今、求められる幼稚園像について再考した。

キーワード： 幼児期前期、協同性、2歳児の発達

1. 研究の動機とねらい

(1) 発達の連続性をとらえるために

当園では数年来「協同性」をテーマに研究を重ね、幼児期後期の教育の充実を目指し、小学校へとつながる時期の幼児に何を育てておけばよいのか、教育として何を体験しておけばよいのか明らかにしてきた。そして、幼児期後期をより充実していくためには幼児期前期の教育が重要であると再認識してきたが、幼児期前期の姿を見ると発達の姿がゆるやかになってきていると感じる。そこで、幼児期前期の教育をさらに充実させていくためには幼稚園入園前の2歳児頃からの連続した発達の姿を探り幼稚園教育に活かしていく必要性を感じている。

(2) 幼児期にふさわしい生活のあり方の検討のために

近年、幼小・保小の交流が進み、一定の成果を挙げている。しかし幼保小連携とはいいながら幼保の連携はどうであろうか。本来、幼保小の連携とは「幼

保＝幼児期の教育」と「小＝児童期の教育」の連携と考えられるだろう。しかし、幼児期の考え方を等しくしなければならない幼保においては、交流さえないなかなか進んでいないのが現状である。当園では5年ほど前から近隣の保育園と交流し、幼稚園として学ぶことが多く、互恵性のある交流・連携の必要性を感じた。幼保が寄り添い修了、卒園までにこの時期の子どもにふさわしい生活環境のあり方について考えていくために子供同士が交流しさらに教員同士が連携し研究し互いが得意な分野をもとに議論を重ねていくことで教育（保育）の質が向上していくのではないかと考えたのである。

(3) 法制化の先行をめぐる戸惑い ～幼児教育界全般の戸惑いの解消のために～

認定子ども園の法制化や「次世代子育て支援」が国の施策として進んでいる。2006年には全国幼稚園教育研究協議会（現全国幼児教育研究協会）が「幼稚園における2歳児受け入れに関する調査研究」を行い、「2歳児においては3歳以上の教育とは異なる質の保育を行なうことが求められる。2歳児は個々への対応が特に要求され、安定した情緒やゆったりとした生活が求められるだけに、きめ細かな養育が出来るよう幼児の人数に応じた2歳児の保育者数の検討が必要である」と結論付けている。また文部科学省からも「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受入れに係る留意点について（通

[†] Akihiko ITO*, Yasuko TAKAYANAGI**, Chiduko IWABUTI**, Ichiro IGARASHI**, Yuki MAEHARA**, Tomomi INAGAWA** and Sayaka HOSHINO**: Development of Children in Early Infancy and its Relation to Education.

* Faculty of Education, Utsunomiya University

** An Attached Kindergarten, Faculty of Education, Utsunomiya University

知)」が通達された。私たちは国立大学の附属幼稚園の使命として2歳児や満3歳児の発達や行動の研究をし理解を深め検討し成果を提供していきたいと考えたのである。

(4) 保護者への支援のために

幼稚園は3歳児が集団生活のスタートであるが、一人一人においては0歳からそれまでの生活、発達がある。そこで、入園前の2歳児らしい生活を知ることによって3歳児以降の教育の充実を目指したいと考えた。2歳児の発達・生活の姿を近隣の保育園の協力により検証したり、家庭における2歳児の子育ての現状を理解(養育環境や保護者の意識を知る)し、子育てに対する不安を解消し保護者へ還元することも大切ではないかと考えたのである。

2 研究の方法

(1) 先行研究・文献研究

2歳児が実際に在園しない当園においては文献や先行研究の洗い出しにより、臨床研究等を参考に2歳児の成長発達や実際の姿を理解する。

(2) 外部講師を招いての園内研修

実際に2歳児とかかわりをもっている外部講師を園内に招き幼児や家庭の様子を講話として聞き、文献・先行研究を深めた話し合いをする。実際の事例を含めた話を聞くことで、幼児の姿をより具体的にイメージし、質疑応答をしながら3歳児との相違や発達の道筋をより理解する。

(3) 2歳児の参観(近隣保育園への参観)

2歳児の発達を知った上で、実際に集団生活を送る2歳児の姿を観察し更なる理解を深めるために近隣保育園の2歳児クラスの参観を行う。一人一人発達の違う幼児の保育にあたって、また時期に応じて保育の留意点が違う幼児の育ちに関して実際に見、生活の様子を知り保育士と話し合うことで、それぞれの園で「何を大事にし」「どう育ててほしいのか」を知り、「2歳児の特徴的な育ちや保育方法」を話し合う機会をもつことで、幼児の発達に応じた具体的な環境について理解を深める。

(4) 保護者の意識調査(アンケートによる)

発達の連続性を考えると幼稚園入園以前の生活を知る事は一人一人を知る意味でも、保育内容を考える意味でも重要な意味をもつ。また、子育てに関して家庭(主として母親)が抱える悩みや問題を共有する事は今後の教育の参考になることもあり入園以前の様子を保護者にアンケート調査をもとに探る。

(5) 「保育を語る会」

県内の様々な幼稚園、保育園、小学校の先生方と意見を交わせる場である。今年度は、幼稚園入園前からの発達の連続性を学ぶために講師の先生を招いたり、2歳児保育をしている保育園・幼稚園の先生方に加えて、地域の子育て支援団体・保護者・祖父母などを招き実際の話聞く機会を設け、それぞれ立場の違う方の話を聞き、2歳児の発達を様々な角度からとらえる。さらに、家庭・地域・幼稚園、保育園など3者が「どう連携をとっていくのか」「何を大事に発達を支えていけばよいのか」共に考える機会とする。

(6) 保育所(園)との交流・連携

本園では4年ほど前から近隣の保育園と幼児同士の交流を行ってきた。子供同士が遊ぶだけでなく、教師・保育士同士が話し合いの時間を持ち、経験の質を考えたり、かかわり方を考えていく中で、交流の時期に応じた環境を一緒に考えたり、援助の方法を探ったりしてきた。これまで積み重ねてきたことを整理し、保育園と幼稚園との連携に向けて互いの教育を理解し合ったり、自分達の教育を見直していく契機としていく。

3 研究の内容

(1) 保育園の生活、幼稚園の生活 ～幼保の交流・連携から学ぶこと～

保育園と幼稚園、子ども達にとっては同じように幼児期を過ごす場である。しかし、保育園での生活や子どもの発達のとらえなどをなかなか知る機会がないのが現状である。そのような中、本園ではナーサリースクールとまつりとの交流の機会をもつことができた。子供同士の交流を通して子供同士が刺激を受け合うだけでなく、私たち教師間で話し合いを重ねることや双方の園で子ども達が遊ぶ互いの生活を理解していきたいと考えた。ここでは、ナーサリースクールとまつりとの4年間の交流の様子を中心に保育園の生活への理解を深めると同時にもう一度幼稚園の生活を見直していきたい。

1年次：平成15年度

子ども達の新しい経験を増やそう

ナーサリースクールとまつりと本園とは歩いて20分くらいのところにある。当初は、幼稚園の庭を開放し、遊びに来てもらうことにした。(平成15年度)1回、2回と回を重ねると、保育園の子ども

達は「幼稚園に遊びに行きたい!」と強く思い、新しい環境での活動が刺激となった。幼稚園でも5歳児の後半には園外からの刺激を活用して保育を組み立てることが有効である。子ども達の望んでいる経験ができることをねらいとし、まずは子供同士、教師同士が互いに親しみを持てるようにした。

2年次：平成16年度

子供同士の接点を意識して活動を計画しよう

子ども達の喜んでいる姿もあり、教師同士も親しくなってきたので、2年目は意図的に子供同士の接点を作って一緒に遊ぶことにした。そこで、遊戯室という限られた空間を利用して一緒に遊びをしたり、互いの普段している遊びに交じっていくような交流の方法も取るように試みた。

3年次：平成17年度

互いの環境への工夫を知ろう

3年目になり、子ども達にとって有意義な交流となるために内容を検討しようと両園の教師が交流の内容を一緒に検討するようにした。また、子ども達が場に慣れたり、互いのことを知って仲良くなるために回数を増やしたり、後半に連続した2日間を設定した。各交流の環境を一緒に考えることで互いの園での環境の工夫を知ることができた。

3年次においては、双方の担当の教師（保育士）と保育園の園長先生を交えて1年間の交流を振り返る反省会をもつことにした。交流を通して同じ場面を見ている教師同士が話をしていくことで交流そのものの反省に加えて、それぞれの教育観を知ったりと教師（保育士）にとっても学び合う機会となった。

4年次：平成18年度

子どもの経験する内容に目を向けよう

4年次は、3年次の反省を受けて、連続した交流を数回組み、前半は幼稚園児と保育園児が互いのしていることが刺激となるような環境を設定してみることにした。後半には互いを意識できる環境を意図的に設定してみることにした。また、教師間の話し合いも交流の前だけでなく、交流後の話し合いも多くなり、一人一人の姿を理解し合えるようにした。交流時の子どもの姿のエピソードは次の通りである。



○子どもの姿から

事例1 交流での刺激を保育に取り入れることで
(9月13日)

保育園のモンテッソーリコーナーの中の一つに3色の毛糸で三つ編みができる場所があり、先生が一人ついていて、一人一人丁寧に教えてもらった。きよみも教えてもらい、自分で作った三つ編みを嬉しそうに持ち帰った。幼稚園に戻ると、三つ編みがやりたいという。そこで、保育室の中に三つ編みができるコーナーを作り、教師と一緒にやり始めた。しばらくするときよみは完全に自分ひとりのできるようになった。次々にやりたい子が入ってきたが、きよみが覚えたことを伝えることで、きよみに教わってできるようになった。あつという間にクラス中で三つ編みが流行り、髪の毛や服に飾ったり、部屋の装飾にしたり、運動会の看板に使ったりいろいろな場面で三つ編みを使うようになった。また、このことで、きよみが友達に認められるきっかけになり、きよみの得意なことを見出すきっかけにもなった。

<考察>

三つ編みのように根気よく丁寧にいかかわっていく活動は5歳児にとって魅力的である。しかし、一人一人にじっくりかかわっていくのは困難である。保育園のコーナーの先生に一对一で教えてもらったことで、自信を持ち幼稚園に戻っても自分からやってみようという気持ちにつながったのだろう。また、ここではこの遊びができるという分かりやすい環境をつくることで、いろいろな子がきよみのしていることに気づき、きよみが友達に認められるきっかけとなった。友達に伝えるのに程よい難しさでやってみたいという思いをみんながもてる活動（教材）であり、作ったものがいろいろなものに活用できるということがその後の活動に広がっていったのだろう。

○1年間の交流の反省と今度の課題（反省会より）

- ・保育園では交流を担当した教員一人一人が自分の思いを記録に残している。本園においては交流の中での事例を研修会で提案し園内で共通理解してきた。交流の担当教員（保育士）は毎年同じ教員が行うことは少ない。しかし、1年間の交流を振り返って、感想や自分たちが学んだことなどをまとめ、整理していくことで次年度の担当教員（保育士）や、交流には直接携わっていない教員にも、交流で子ども達の経験していることや次年度の課題を把握できたりする。

・今年度は、少しでも子ども達の活動の時間を長くするように保育園でも工夫したので、以前は1時間程度だった交流が2時間近くできるようになった。そのため、遊びが深まり、一人一人がやりたいことを追及したり、友達とやりとりしながら活動を進たりしていく時間が確保された。

・事前・事後の話し合いでは、交流中の子どもの経験や育ちを互いに理解しあうことができた。園内では友達とうまくいかないことが多い子も、園外の友達に普段とは違った見方で見てもらえたり、違った環境でやりたいことを見つけて向かっていけることで、自分の力を存分に出せる姿も見られた。

・来年度は、前半は保育園児が幼稚園の環境で自分たちで遊ぶことをねらい、幼稚園での年長組の生活が落ち着いてきた後半には、双方の接点を作っていくことで幼稚園児も対等にかかわりをもっていけるようにしていきたい。

・子どもの育ちや環境について話し合い、5歳児にとってどんな経験が必要なのか共に考えていきたい。そのためにも、互いの留意点を入れながら日案（デイリープログラム）を作っていくと考える。

(2) 2歳児の姿から発達の連続性を考える

① 3歳児入園直後の混乱から

入園してくる子どもたちは、それまでの生活がひとりひとり異なるので、入園してからの姿が様々なのは当然である。それは入園直後の姿として3歳児らしい姿である。しかし、最近、これまでとは少し違う子どもの戸惑いが見られるようになってきた。

この表を見る限りでは、20人全員がいろいろな理由で戸惑っているが、この中から特に気になる姿をエピソードとして以下に挙げてみた。

★ エピソード1 「できたはずなのに・・・」

入園直後のまことは、積み木が大好きでよくお城をつくって遊んでいた。積み木の積み方もくずれないように着実に下から積んでいき、あつという間に左右対称の立派なお城をつくりあげる。それから一週間、まことは毎日同じ形をつくって遊び続けた。それから数週間、しまっておいた積み木を久しぶりに出したのでまことに声をかけると、まことは積み木の前にいったものの「先生、やって」という。まことと一緒に積み木で遊んでみるが、まるで別人のように積み木を積むことができず、「どうやるの、どうやるの？ やって、やって！」と連発する。

(教師の思い)

これまで得意だった積み木がだんだんつめなくなったことに教師も驚いた。積み方を忘れてしまったのか。まことの姿から積み木で遊ぶというよりはやり方を教わり、それに従って積んでいく経験をつんできたのではないかと推測した。

★エピソード2 「心も体も動かない」

あいこは朝、登園するとポケットの中に手を入れて無表情で周りを見渡す。教師が声をかけたり遊びに誘ったりするが反応はない。あいこが興味をもつものは何かといろいろなものを見せたり遊具に誘ったりしてみるが何を見ても反応がない。教師がマットの頂上に登り「あいこちゃんもおいでよ！」と声をかけるが全く反応がない。

(教師の思い)

あいこが自ら心を躍らせてかかわるものを必死に探した。心が安定すればお気に入りの遊具や場や先生や友達が見つかるのではないかと考えていたが、なかなか心も体も動かなかった。かかわり方がわからないのではないかと一緒に遊ぼうとしたが、その場で立ちつくしていることが多かった。何かで遊んで楽しいという経験をしたことがあるのだろうかと疑問に思った。

では、このような子どもの姿が現れる背景として考えられることの仮説をたててみた。

○早期教育によるゆがみ

最近の子供たちは乳児のうちからいろいろなことを教え込まれ、それに従うことで大人に認められる経験を積んできてはいないだろうか。自分の手足を使って自分なりの思考で自由に物事を考え想像する力が育っていないように思う。

○経験不足 (体を動かす経験・人とかかわる経験・・・など)

少子化の影響で地域に同年代の子供たちがいなくなったり家の中で過ごすことが多い生活スタイルで外に出る機会が少なかったりして、遊びの中で体を動かす経験や人とかかわる経験が少ない子供が多いように思う。だから就園して大勢の子供の中でどのようにあそんだらいいのか迷ったり、遊んでいて大きなけがをおってしまったりするのではないだろうか。

○親の養育態度 (放任・母子密着・厳しいしつけ・愛情不足・過保護、過干渉など)

保護者の養育態度は様々であってしかるべきだが、

それが極端になってきているように思う。特に少子化で核家族が増えている中で母子が密着しすぎて過保護・過干渉になりしつけが厳し過ぎたり甘やかしすぎたりして子供が本来の自分を素直に表現できなくなっているケースが多くなってきているように思う。また、逆に大人中心のライフスタイルに子供を巻き添えにしたり自分のことで精一杯になってしつけをしなかったりして、結果として子供たちが放任になってしまっているケースも多いのではないだろうか。

このような子どもたちの戸惑いをもっと深く知り、自分たちの保育を見直すために、2歳児の生活に立ち戻って考えてみたいと思う。そもそも、このような子供の姿が現れるのは、2歳児の発達が理解されておらず、2歳児らしい生活がひとりひとりに保障されていなかったからではないだろうか。では、その2歳児の発達を踏まえた2歳児らしい生活とはどのようなものなのだろうか。

② 2歳児の発達を踏まえた2歳児らしい生活とは～保育園の2歳児を観察して～

2歳児の特性をとらえるために、まず保育園の2歳児を参観することを試みた。家庭で過ごす2歳児とは違った面が見えるであろうことも踏まえた上で、集団生活の中の2歳児としての姿をとらえたい。また保育士の2歳児に対する援助や、園の環境などからも、2歳児の生活で大切にしていることを探っていきたいと思う。

協力：ナーサリースクールとまつり

つるた保育園

うめばやし保育園

i) 2歳児の特性と実際の姿

参観するにあたって、2歳児の発達の特性（資料「構造改革特別区域『三歳未満児に係わる幼稚園入園事業』の実施に係わる留意点」平成18年5月 文部科学省初等中等教育局幼児教育課の6つの視点を手がかりに参観したところ、2歳児らしい姿が見られた。

特性1 自己主張と甘えの気持ち

生活に必要な行動が徐々に一人でできるようになり生活習慣の自立が進むが、一方では、まだ大人の励ましや手助けが必要である。

特性2 基本動作の獲得と危険

体力がつき、少しずつ運動動作が発達してくるの、行動が活発になり、転がる、跳ぶなど全身を使う運動を楽しむようになる。また、興味をもった体の動きを繰り返しながら、様々な基本動作を獲得していく。

特性3 平行遊びとぶつかり合い

友達と一緒にの場所と同じ遊びをしていても、相互のかかわりが少なく、平行遊びであることが多い。大人の仲介によっては、友達に関心をもち、一緒に遊ぶこともあるが、その場合、互いに自己主張をして譲らず、言葉で思いをうまく伝えられないことから、叩いたり噛みついたりするなど取っ組み合いのけんかになることもしばしばである。

2歳児は主張が出てくるのでトラブルになることもある。まだ言葉で表現することが上手くできないのでとっさに噛み付いたり、叩いたりしてしまうことが多いようである。しかし、相手があきらめた瞬間に自分も気持ちが他に向いてしまったり、近くにあったものに興味が向いてぶつかり合っていたことを忘れてしまったりと、思いはそれほど持続しないようである。ぶつかり合いの場面で教師が上手に一人一人の気持ちを転換して次の遊びを見つけていくことが友達の中でも心地よく過ごせるようになるであろう。

特性4 つもりになって遊ぶ姿

「ごっこ遊び」などの、何かになった「つもり」を取り入れた遊びをするようになってくる。こうした遊びの中で、身近な大人の行動やしぐさを取り入れる経験を繰り返すことを通して、幼児の観察や模倣がさらに進み、現実の生活をなぞり再現しながら、その幼児なりの理解ではあるが少しずつ自分の生きる世界を知っていく。しかし、一方で、幼児のイメージの表現は素朴で断片的であり、その幼児なりの表現なので周りに伝わらず、遊びがすぐに終わってしまうことも少なくない。自分の力で遊びを創り出す力はまだ未熟である。

幼稚園児も身近な大人をまねて遊ぶが、2歳児頃からそういった姿が見られることがわかった。まずは一人一人がイメージに浸り、十分にその世界を楽しむように大人がかかわり、その子のイメージを大切にしながら、時期と必要に応じて友達との間をつないでいくことも大切だと思われる。

特性5 言葉に対する興味とかんしゃく

単語だけ、あるいは助詞がなく二語文ではあるが、生活に必要な言葉が少しずつわかり、大人と簡単な言葉のやりとりができるようになる。生活の中で聞き取ったいろいろな言葉を自分で使ってみる姿も見られる。しかし、したいことや感じていることなどの自分の思いを言葉にして相手に伝えることはうまくできず、時には、かんしゃくを起こしたりする。

思いが言葉にならないもどかしさを感じているのを支え、思いが言葉になった達成感や、伝える満足感を味わう経験を大切にしていきたい。また、遊びの中で、知っている言葉をやりとりするリズムにも、楽しさを感じていたり、友達と同じ雰囲気を楽しむ時期であり、友達と一緒に言葉を発する楽しさが、いずれ幼児期の伝えたい思いを行き交わせる姿にもつながっていくのだろう。

特性6 簡単な決まりや約束

信頼する大人の言うことを正しいと受け入れて、結果的にそれを素直に従う傾向が強い。したがって、人を叩く、ものを投げるなど、してはいけないことについては、大人が、具体的な場で、はっきりと否定したり、どうしたらよいかを知らせていくことが大切である。

この時期が遊びのきまりや約束を守るように働きかけるチャンスであることがわかった。この特性を生かして、大人との小さな約束を守ることができた満足感をもつことで、大きくなった自分を感じ、自信をもって生活する姿に育てていきたい。気を付けなければならないのは、大人が大人の価値観を2歳児に押しつけたり、素直に言うことをきく事だけを認めるような態度で接したりしていると、自分らしさが失われ、大人の望む姿になろうとする幼児になってしまう危険があるということではないかと思う。

以上の6つの視点から、2歳児の発達の特性を踏まえ受け止めてかかわっていくことが大切であることが理解できた。



ii) 保育園の生活の実際

保育園では、2歳児の発達を踏まえた生活の流れや環境がつくられているのか、実際に参観した。保育室は、排泄や身の回りの始末など自分で出来るようにきめ細やかな配慮がなされ、基本的な生活習慣を獲得していけるような環境構成になっている。また、スペースの使い方、遊具の出し方、種類やその数など、その環境の中で2歳児が自分の力を十分に発揮して遊びに没頭できるように、それぞれの保育室で配慮し工夫されていた。特に、2歳児の発達を踏まえて配慮していることは次のことであった。

トイレのスペースの充実

排泄の自立に取り組む大切な時期なので、保育室とトイレがつながっていて親しみやすい雰囲気とし、自立してからは自分でできるように配慮されている。また、2歳児は自分では生活できないのに排泄の場面でも「自分で」という気持ちが強いので見守り、依存しながら自立を支えていく時である。

荷物の整理

月曜日は親から離れ、朝は寒いし、子どもは心細いと感じているので、少しのんびりと支度を見守る。子どもが自分でやりたい、やろうとする気持ちを大切にしながら手助けをして出来ることへの喜びを感じとれ繰り返すことが大切である。

外遊び

天気の良い日は園外に散歩に行き、身体を動かすようにする。2歳児頃から身体運動のコントロールも発達してくるので危険回避の能力をつけていくことも必要である。

水分補給

遊びながら水分を補給できるように常にお茶とポットを用意しておく。おやつや食事は体によい素材を使い栄養を考慮し、歯ごたえのあるものを出すようにしている。

家庭的な雰囲気の保育室

保育室は家庭的で暖かい雰囲気、必要な生活習慣が身につくように個人別の収納棚、タオルかけ等がある。教師が「母親」となって愛情をかけてあげることが大切である。

午睡

一日に必要な睡眠時間の補いとして、また、活動によって疲れた体を休め回復させるために午睡をとります。家庭で早起きの習慣をつけさせるように決まった時間で起す。

③入園前の生活を探る～保護者の意識調査より～

3歳児入園当初の子ども達の混乱の様子を見るとそれまでの育ち、つまり2歳児の発達が保障されていたのかと憂慮されることが多々ある。そこで、保護者自身が2歳児をどのようにとらえて子育てしているかなどを知るためにアンケート調査を行った。その結果は次のとおりであった。

i) アンケート結果から、全体的な傾向を探る

アンケート対象者：在園児保護者142名と新入園児の保護者70名の計212名

・2歳児での集団生活の経験はあるか？

『あり』約7割 『なし』約3割

・2歳児の時はどんな子だったか？(回答の多い順)

①やさしい ②活発 ③慎重 ④陽気 ⑤素直
⑥おしゃべり ⑦頑固 ⑧積極的 ⑨用心深い・ほがらか ⑩無邪気

・子育てで大切に育てたいことは何か？(回答の多い順)

①挨拶をする ②思いやりの心をもつ ③元気でよく遊ぶ ④ルールを守る ⑤自分のことは自分でする ⑥規則正しい生活をする ⑦きちんと言葉で言う ⑧友達にやさしくする

・子育てで大変だったことや難しいことは何か(回答の多い順)

①言うことをきかない ②すぐに泣く ③人見知りをする ④何でも自分でやりたがる ⑤かんしゃくをおこす ⑥すぐに「できない」と言う ⑦落ち着きがない・何でもしつこく聞いてくる ⑧すぐに甘える・言葉をはっきりしない・おもちゃを独り占めする ⑨すぐに「いや」と言う ⑩さわがしい

・子育てで大変だったことや難しいと感じたことのエピソード

子どもが集まる場所ではけんかになり、スーパーに行くときに行きたい所以外には行かないので買い物にならなかった。外出を控え、家にこもったり、人気のない所で遊ぶようになっていくことが、元気で興味津々な子どもに逆行していて悩みました。

・どこかに子どもを預けたいと思ったか？

『はい』(約6割) 『いいえ』(約4割)

どのエピソードからも、保護者が2歳児の発達の姿に戸惑い、深刻に悩み、どう子育てしてよいかと困惑している様子が伺える。保護者自身が2歳児の発達や特性について知り、発達の見通しがもてるよ

うになることで子育ての不安感は軽減され、ゆったりとした気持ちで子どもと接することができるようになるであろう。その結果、家庭での2歳児の生活や発達が保障されることにつながらないだろうか。

ii) アンケート結果から個人をとらえる(一日入園の親子のかかわりの記録から)

アンケート結果から全体的な傾向は把握できたが、実際に親子のかかわりの様子を見ると、これまで、家庭でどのように育てられてきたのだろうか、発達に即した経験がされていないのではないかなどの気になる姿と共に、子どもの気持ちを受け入れながら親子が上手くかかわっている姿も見られる。そこで、一日入園時の親子のかかわりの様子を観察し、それまでの家庭での育ちや生活について、アンケート結果をも交えながら探ってみた。一日入園での親子のかかわりの様子を見ると、子どもに過干渉すぎたり、子どもの遊びに理解や関心がないように見られた親子では、子どもの遊びへの意欲にブレーキをかけてしまったり、子どもが慎重しすぎて遊べなかったりと終始落ち着かないようであった。一方、上手くかかわっていた親子の場合では、子どもは遊びへの意欲が高く落ち着いた表情で遊んでいた。また、複数の教師で親子のかかわりの様子を見合うことは、それまでの家庭での育ちや生活、発達を多方面からとらえることができるようである。



3 成果と課題

(1) 教育課程の改善に向けて

2歳児の発育・発達や保育の在り方についての研究を進める中で、乳児期から幼児期前期へ、幼児期後期から児童期へという連続した発達(2歳から7歳を見通して)の姿を捉えることができた。これらの姿を基本に、幼稚園における教育機関の全体にわたって幼稚園教育の目的、目標に向かってどのような道筋をたどって教育を進めていくかについて改め

て考えていきたいと思う。

＜「自分の力で行動できる喜びや自信を感じる」経験の大切さ＞

2歳児は、生活の中で自分の力でできることが少しずつ増え、自分に対する自信が芽生え、その自信がエネルギーとなり意欲的に行動しようとするようになる時期である。3歳児はその延長上にあり、環境に対し、がむしゃらに行動することを通して感覚を通して学んでいく時期である。これまでの教育課程では、この「行動期」の姿を幼稚園のスタートとして考えてきたのだが、「行動期」以前の経験を十分に積んでいない幼児も多く存在していることを踏まえてこの時期のあり方を考慮しなければならないと思う。

＜幼児にとっての「生活や遊びを通して」の意味を再考＞

幼児期に必要な経験は「生活や遊びを通して」体験される。現代の社会では、家庭生活の中で、生活に必要な行動を通して、自分への自信を持つまでの経験が少なくなってきたことが2歳児から3歳児にかけての大切な心の発達に影響を及ぼしていることはないだろうか。幼稚園においては、自然な生活の展開の中で行動を通して成就感が味わえるような場面を意図的に創っていかなければならないのかもしれない。幼児の興味関心により「生活や遊び」の中で必要な経験を捉えていけるために、幼稚園生活全体の中で、幼児にとっての「生活」の内容を再考していきたいと考える。

＜意志・意識を育てるという視点をもつこと＞

最近の気になる幼児の姿のひとつに、「行動に向かう意識」がある。何となく周りの雰囲気につられて行動してしまう幼児、どこに靴を脱いだのかさえ全く意識に残っていない幼児、一つの行動が完結しないままに目を引かれたものに次から次へと興味が変わってしまう幼児等、行動の裏に自分の意志が感じとれない姿を多く目にする。幼稚園での教育期間全体の中で「意識を育てる」「意志を育てる」という観点を加味しながら幼稚園での活動や行動のあり方を検討していきたいと考える。

＜2年保育4歳児の生活経験の多様さを踏まえた教育課程の検討＞

4歳児で入園する幼児のそれまでの生活経験の個人差がますます広がり、2年保育4歳児の保育の課題はますます大きくなるばかりである。幼児の生活

経験がそれぞれ異なることを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題を捉えていけるような、わかり易い教育課程が求められよう。

(2) 園内研修の充実

ますます広がる幼児の生活経験や保護者の教育観による発達の個人差に対して、幼児一人一人の発育・発達状態を把握し、一人一人の実態に沿ったきめ細かな援助が求められている。幼稚園、保育園での実際の保育の有り様とともに検証しながら（「保育を語る会」の充実）「一人一人の発達の特性に応じた指導の在り方」について深めていきたいと考える。このことは、特別支援教育の理念とも相通じるものがあり、幼児教育の基本であることを今一度確認したい。また、特に幼児前期の発達と教育に関しては、文部科学省よりの通知「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受け入れに係る留意点」の中で、家庭の教育力の再生・向上につながる子育て支援として、親子登園の機会の提供・子育てを話し合う場の提供が提案されている。2歳児に関わる全ての大人が、2歳児の発達の特徴を理解し、ふさわしい生活が展開され、この時期に必要な活動内容を十分に経験できるように理解を深めていけるような子育て支援や教員の研修を考えていきたい。

(3) 保護者や地域の教育力を生かした子育て支援の構想

幼児教育を地域に開かれたものし地域で幼児教育の振興のための取り組みを進めていくために、保護者や地域、教員養成大学（当大学）の学生の教育力を生かした子育て支援の取り組みを構想し実施していきたいと考える。

- 家庭教育オピニオンリーダーを活用した「2歳児親子ふれあい講座」
- 学校等支援ボランティア・教育実践インターンシップを活用した子育て支援
- 父親の家庭教育参加を促進する「父の会」

